江戸東京博物館
NEWS
EDO-TOKYO MUSEUM NEWS
江戸東京博物館ニュース
Vol.115
2022.1~3

休館前 記念号

CONTENTS

・企画展　徳川一門 ──将軍家をささえたひとびと──
・朝野新聞社と東京の近代ジャーナリズム
・「洋風建築のはじまり」としての擬洋風建築　東京都江戸東京博物館 館長　藤森 照信
・研究の散歩道　直筆原稿のたのしみ

企画展

徳川一門
―将軍家をささえたひとびと―

2022年1月2日(日)～3月6日(日)
常設展示室内　5F企画展示室　＊会期中に展示替えがあります。

1603年（慶長8）に征夷大将軍となった徳川家康は、260余年にわたる泰平の世を築きます。しかし将軍職は嫡男によって順調に継承されたわけではありませんでした。また幕府も将軍のみで成り立っていたわけではなく、老中や若年寄ほか多くの人によって支えられていました。そこで、本展では家康から血縁で連なる人々が、いかに将軍家の存続に寄与したかを垣間見たいと思います。

家康は9男義直・10男頼宣・11男頼房を大名とし、後の御三家を起します。御三家には重要政策への参画や、後嗣がいない場合に将軍継承者を輩出するなど、他の大名とは異なる役割が期待されました。これにより7代将軍家継が夭折し血統が絶えた時、紀伊家より吉宗が将軍家を相続しました。

吉宗は将軍家を維持するため、次男宗武と4男宗尹に、また9代将軍家重も次男重好に江戸城内の屋敷を与え、田安・一橋・清水の御三卿を誕生させます。彼らは家族として将軍家を支えることになりました。

一橋家より11代将軍となった家斉には53人の子女がいました。その子を御三家、御三卿さらには外様大名などへと配し、将軍家を外から支えさせました。7男斉順は紀伊徳川家11代となり、その子は14代将軍家茂となりました。また津山藩主の16男松平斉民（確堂）や徳島藩主の22男蜂須賀斉裕は、幕末に大きな役割を果たしています。

政情不穏な幕末に登場したのは、水戸家出身で一橋家から将軍となった慶喜でした。さらに13代将軍家定の御台所であった天璋院（篤姫）や、14代将軍家茂に降嫁した皇女和宮も忘れられません。また、わずか6歳であった亀之助は田安家から将軍家を相続して徳川家達となり、幕府終焉後に徳川の家名を存続させました。

家康以後、徳川将軍家は一門に支えられて継承されたのでした。本展では、このような人々の活躍を、徳川宗家ゆかりの品々を通してご紹介いたします。

東照大権現像　徳川記念財団所蔵

本小札濃勝糸威二枚胴具足
資料番号 08200030

萌黄紋縮緬地雪持竹雀文 小袖
徳川記念財団所蔵
展示期間：1月2日～1月30日

朝野新聞社と東京の近代ジャーナリズム

常設展示室の東京ゾーン入口には、原寸大の朝野新聞社のファサードが復元されています。「朝野新聞」は、1874年（明治7）9月に「公文通誌」（1872〈明治5〉年創刊）を改題し発刊されました。改題に際し、旧幕臣の成島柳北を局長に迎え、本格的な政論新聞となりました。

朝野新聞社　復元年代：明治10年代（1877～86）　縮尺：1/1

1872年、東京初の日刊紙「東京日日新聞」の創刊を皮切りに、次々に新聞が創刊され、東京の近代ジャーナリズムが開幕しました。1874年1月に板垣退助らが「民撰議院設立建白書」を提出すると、自由民権運動が高揚しました。そして、政府の立場を擁護する官権派新聞と、自由民権運動の立場を支持する民権派新聞は、紙上で激しい言論戦を展開しました。しかし、1875年（明治8）に新聞紙条例と讒謗律が公布され、政論に対する取り締まりが強化されるようになりました。

そのような状況の中で、「朝野新聞」は、民権派新聞として政府を辛辣に批評し、人気を博しました。その人気を支えたのが、成島柳北と末広鉄腸という二人の個性的なジャーナリストでした。柳北が軽妙洒脱な文章で時事を風刺した「雑録」と、1875年10月に編集長に迎えられた鉄腸が「論説」内で行った政府への鋭い批判が評判となったのです。また、柳北主宰の詩文会の記事を掲載するなど、現在の文化欄に相当する欄を最初に設けた新聞でもありました。柳北と鉄腸は、紙上に掲載した政府に対する批判によって、処罰を受けることもありました。しかし、その言論弾圧に対抗する姿勢が人々の心をつかみ、「朝野新聞」の発行部数はかえって増加しました。

1876（明治9）年には発行部数増加の勢いに乗り、銀座4丁目の角、現在「和光本館」がたつ場所へ進出しました。この頃には「朝野新聞」は、官権派の「東京日日新聞」、民権派の「郵便報知新聞」、「東京曙新聞」とともに東京の四大新聞の一つとして、当時のジャーナリズムを代表する存在となりました。そして、文明開化を象徴する街である銀座煉瓦街には、次第に新聞社が集まり、ジャーナリズムの中心地となっていきました。（学芸員　秋間敬代）

「朝野新聞」第2270号　1881年（明治14）4月15日
資料番号 93201380

「洋風建築のはじまり」としての擬洋風建築

東京都江戸東京博物館 館長
藤森 照信

日本とヨーロッパの建築は、ユーラシア大陸の東西両端に位置するからほぼ無縁のまま歴史は推移し、幕末・明治初期に突然、関係が生じ、日本はヨーロッパ建築（洋館）を取り入れようと志しても、急に学べるものではなかった。

１８７９年（明治12）に辰野金吾などが工部大学校を卒業し、日本最初の建築家として活動を開始するまでのほぼ10年は日本人建築家不在の空白期間となるが、しかし幸いこの空白を埋める人々がいた。

伝統の大工棟梁である。彼らは、新しい時代のスタートに強い刺激を受け、洋風に憧れながら、しかし洋風の技術も様式も分からないまま、見よう見真似で洋風に擬えた独自の表現を実現してゆく。これを

〈擬洋風建築〉

と呼ぶ。発生源はヨコハマの外国人居留地であった。

ヨコハマに来航した欧米の建築技師たちのうちの何人かは、洋風の商館や住宅や公館を設計するだけでは飽き足らず、せっかく東洋の果てまで来たのだからこの地の伝統を取り込もうと考え、日本の大工棟梁の協力のもと洋風の中に和風を取り込んだ表現を実現した。

第一国立銀行　『実写奠都五十年史』1917年（大正6）発行　国立国会図書館ウェブサイトより転載

彼らに協力した大工棟梁の一部はそうした和洋折衷表現に衝撃を受け、ヨコハマの外へと持ち出し、まず新東京で実現する。その代表が清水喜助（２代）であり、その代表作が渋沢栄一からの依頼で作った〈第一国立銀行〉１８７２年（明治5）だった。

第一国立銀行 模型　復元年代：明治初期（1872～77）　縮尺：1/25

第一国立銀行の写真を見ると分かるように、全体がゴチャゴチャしているが、しげしげと観察すると、四角な1、2階の層と、その上の屋根の目立つ層

開智学校（正面中央部）の唐破風につけられた開智学校の看板　撮影：藤森照信

開智学校（全景）：漆喰系擬洋風建築の代表　撮影：藤森照信

（3、4、5階）とで大きく二つに分かれ、下の層はヨコハマの洋館のベランダ・コロニアル様式を踏襲し、上の層はあたかも城の天守閣状を呈する。

実用的な1、2階は洋風を基本とし、非実用的な上層で和を取り込む。

構造の作りは、外壁は、石積みの壁と木造の柱・梁を鎹で繋いで一体化し、室内の柱・梁は伝統の木造。

石の壁と木の柱・梁を一体化する珍しい技術は、開拓期のアメリカが起源で、アメリカ人建築技師ブリッジェンスがヨコハマに持ち込んだものに清水は学んでいる。

こうしてヨコハマから文明開化の東京に持ち出された擬洋風は、以後、全国各地に伝わり、各地の大工棟梁は大小さまざまな擬洋風を生み出してゆくが、建築の種類は役所、学校、病院といった公的施設に限られ、住宅に使われた例はほとんど無い。

公は洋、私は和、この使い分けは当時の日本人の共通認識であった。

全国各地の大工棟梁の手がけた公的建築を代表するのが、松本で立石清重が手がけた〈開智学校〉1876年（明治9）である。

立石は、地元民の寄付と公費で作られる初の小学校建築の棟梁に選ばれたことを意気に感じ、ヨコハマ、東京など先進各地の擬洋風を訪れ、そこに自分の好みを加え、世にも類まれな小学校を生み出す。

正面の中央部に、竜が海から紫雲目指して駆け上がる姿をモチーフに車寄せを作り、車寄せのバルコニーの上には唐破風が付き、その下にはエンジェルが〝開智学校〟の看板を掲げ持つ。

あまりの自由奔放な造形に、和と洋の両方を越えた何か別の境地を目指したのではないかとすら疑われよう。

文明開化の風潮を極限まで押し詰めて表現した開智学校は、漆喰で洋風を模していたが、1877年（明治10）を境にもう一つ別の擬洋風が生まれ、開智学校のような漆喰系擬洋風に取って替わる。

それが山形の〈済生館〉1879年（明治12）に代表される下見板系擬洋風建築である。文明開化的造形性は弱いが、作りやすさや耐久性の面では優れ、この系統は以後長く続き、やがて町の写真館や病院に流れ込み、日本の社会に広く根差してゆく。

済生館：下見板系擬洋風建築の代表　撮影：藤森照信

直筆原稿のたのしみ

学芸員 橋本由起子・文

パソコンで文章を書くことがすっかり定着した現代、さらに貴重さを増しているのが作家の直筆原稿である。当館でも芥川龍之介や横光利一といった作家の原稿をいくつか所蔵しているが、なかでも興味が尽きないのが夏目漱石の「明暗」反故草稿である。

反故草稿とは作家が推敲する過程で不要となった原稿のことをいう。当館が所蔵する「明暗」反故草稿は431枚。漱石が朝日新聞社入社後に、橋口五葉にデザインを依頼してつくったオリジナルの原稿用紙が使われている。新聞の連載小説だった「明暗」は、各回一枚目の原稿用紙欄外に算用数字で連載回数が記され、「漱石山房」印字右側龍の頭のデザイン下にその回の何枚目であるかが書かれている。（写真3）

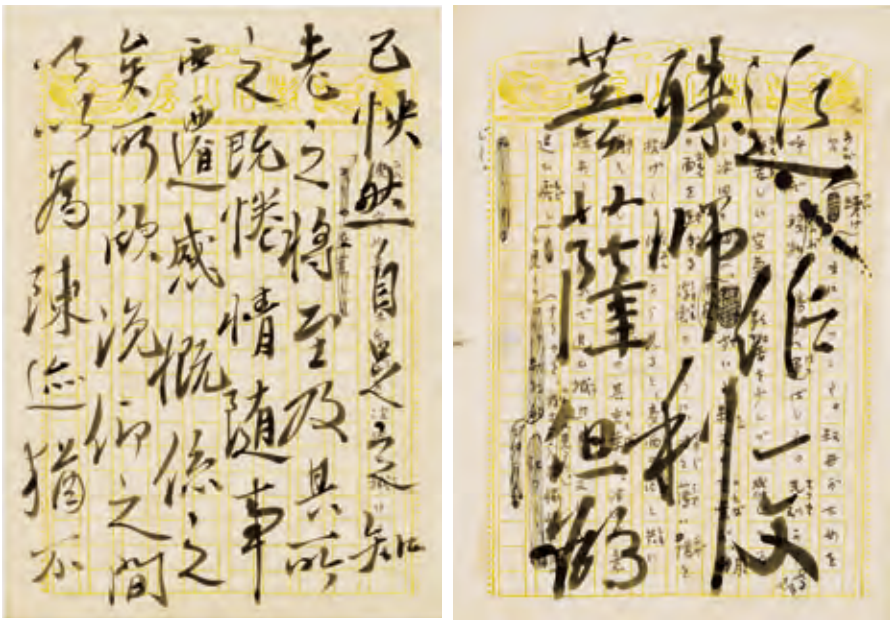


写真1・2　**夏目漱石「明暗」反故草稿**　1916年（大正5）　資料番号 02303491
左は王羲之「蘭亭序」、右は顔真卿「文殊帖」の手習いの跡

当館所蔵の反故草稿の大部分が連載第6回から第115回までの分に当たる。原稿は一枚目の書き直しが多く、各回の書き出しに苦心した様がうかがえる。また表裏問わず書き込みがある。筆による墨書が多く、内容は漢字、仮名、英文・英単語、計算、記号、絵など。とくに目立つのが墨書による手習いの跡である。文学研究では、「明暗」という作品が成るまでの推敲過程に関心が集まるが、この本文以外の書き込みにも膨大な〈情報〉がある。例えば手習いの跡とされる文字を追っていくと、それが王羲之「蘭亭序」や顔真卿「脩書帖」「文殊帖」など、稀代の能書家の筆に倣った跡であることがわかる。漱石作品には、登場人物が東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）の表慶館で、王羲之の「喪乱帖」を見る場面があったり（「行人」）、「蘭亭序」の一節「天朗気清」に由来する「天気晴朗」という語句が挿入されていたり（「吾輩は猫である」）、漱石の書への知識がうかがえる場面がしばしば登場する。また、東北大学が所蔵する漱石の旧蔵書「漱石文庫」にも書道関連の書籍や拓本が多数残されている。その事実において反故草稿の書き付けは、名筆を黙々と臨書し、書の世界を探究する漱石の姿をまざまざと伝え、漱石と書というテーマをより深く考えさせてくれる。

見れば見るほど新たな情報をもたらしてくれる「明暗」反故草稿。まさに研究のたのしみを実感させてくれる資料である。

写真3　①は連載回数を、②は原稿がその回の何枚目に当たるかを示す。
連載回数の数字は消されているが、この原稿では「91」と書かれている。

キュレーターズ・チョイス

Vol. 13

江戸博コレクションより キューピー形のしおり

粉ミルクや、離乳食などでおなじみの和光堂（わこうどう）は、1906年（明治39）に薬局として創業し、国産初の粉ミルクや、ベビーパウダーなどの乳幼児関連商品を100年以上にわたって製造販売する歴史ある会社です。

日本ではベビーパウダーを指す固有名詞のように用いられる「シッカロール」とは、和光堂の主力製品の商品名です。

キューピーが描かれたこちらのしおりは、販促品（ノベルティ）として製作されました。商品の認知度を高めるために、お店にて無料で配られたものです。このしおりがつくられた1950年代は、出生数も多く、いろいろな乳幼児向け商品が登場した時代です。日本でのテレビ放送が始まった時代を象徴するようなデザインとなっています。

（学芸員　早川典子）

キューピー形のしおり
1950年代　和光堂／製作
資料番号 02004927

図書室から お知らせ

図書室の仕事 Vol. 7

「レファレンス」を公開する ――「レファレンス事例集」

「レファレンスサービス」とは利用者が学習や研究、調査などで情報を求めた際に図書室の機能を使って参考となる資料をご案内するサービスです。寄せられた質問に司書がどのように考えて回答を導き出すか、については、NEWS Vol. 109でご紹介しました。

今回は、そのようにして蓄積されたレファレンス事例集をご覧いただけるサービスについてご紹介します。

現在ではインターネットで検索すれば誰もが多くの事を調べられますが、より信頼できる情報を得るには専門知識が必要な場合があります。例えば「日本橋が架橋されたのは何年か」といった相談が寄せられた際、司書はどのように文献を紹介するのでしょうか。こういったいくつかのレファレンス事例を取り上げ、一般に利用できるよう再構成しインターネットに公開しているのが、当館ホームページの中にある「レファレンス事例集」（https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/purpose/library/reference/）です。

ここでご紹介している参考文献はお近くの図書館にも所蔵されているかもしれません。調べ物の際に是非ご活用ください。

図書室休室のお知らせ

当館7階図書室は、大規模改修工事に伴い、2022年（令和4）3月13日（日）をもちましてしばらくの間、休室いたします。

休室前は混雑が予想されますので、早めのご利用をご検討ください。またこの先、移転準備のため、一部ご利用いただけない図書資料が出てまいりますので、来室前にお問い合わせいただくことをお勧めいたします。（例年12月に行っております整理休室は本年は行いません。）

なお、現在の施設での図書室の再開は2025年（令和7）度中を予定しておりますが、大規模改修工事中の仮事務所において、事前予約制により本の閲覧サービスを行う予定です。詳細が決まりましたら、ホームページでお知らせいたします。

皆様にはご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

江戸東京たてもの園

〒184-0005 小金井市桜町3-7-1（都立小金井公園内）
TEL 042-388-3300　https://www.tatemonoen.jp

江戸東京博物館分館
江戸東京たてもの園から

そよ風

公式インスタグラムアカウント開設

2021年（令和3）は新型コロナウイルス感染症の影響により、たてもの園は5か月間にわたり休園となりました。本来であれば、たてものに加えて春の桜をはじめとした四季の風景を楽しめる当園ですが、それをご覧いただくことが叶わない状況を、不本意ながら経験することになりました。

この経験を踏まえ、江戸東京たてもの園では、この度新たに公式インスタグラムアカウントを開設しました。現在こちらのアカウントでは、園内の四季の移り変わりをはじめ、展覧会の開催情報、復元建造物のみどころ紹介など、園の魅力を発信しております。他のSNSと比べ、そうした様々な写真・動画を一堂にご覧いただけるのは、インスタグラムの強みと考えています。また、なかなかお越しになれない方にも園を楽しんでいただけるよう、情景再現イベントの配信も行っていく予定です。是非一度チェックしてみてください！

TATEMONOEN
フォローはこちらから

ミュージアムショップ　休館前特別セールのお知らせ

SALE

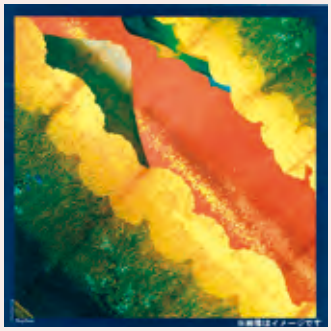
当館は、大規模改修工事を行うため2022年（令和4）4月から全館休館します。再開は2025年（令和7）度中を予定しています。長期休館を前に、オリジナル商品・書籍の一部の価格を見直し、1階ミュージアムショップの特設コーナーにて販売しています。

館蔵資料の「武蔵野図屏風」をデザインしたスカーフ（2種類）や、常設展図録などの当館に関する書籍、過去の特別展の図録などがお求めやすい価格となっております。割引対象商品は、江戸東京博物館オンラインショップでもご購入いただけますので、ご来館が難しいお客様はぜひこの機会にご利用ください。なお、各商品は売り切れ次第終了です。

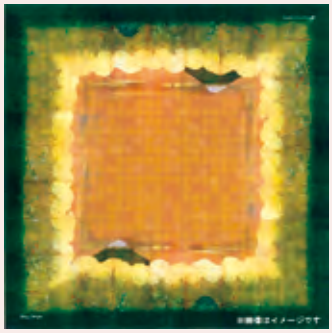
江戸東京博物館
常設展示総合図録3版
999円 ▶ 500円（税込）
全125ページ

模型でみる江戸東京
江戸東京博物館
常設展示図録〔模型編〕
961円 ▶ 480円（税込）
全129ページ

図表でみる江戸東京
江戸東京博物館
常設展示図録〔図表編〕
1,761円 ▶ 880円（税込）
全261ページ



江戸博コレクション
武蔵野図屏風シリーズ スカーフ
7,600円 ▶ 3,800円（税込）
90cm×90cm　絹100パーセント



江戸博コレクション
武蔵野図屏風シリーズ 風呂敷 de スカーフ
7,600円 ▶ 3,800円（税込）
90cm×90cm　絹100パーセント

祝祭都市：江戸東京
江戸東京博物館所蔵
浮世絵版画コレクション
1,833円 ▶ 1,467円（税込）
全187ページ

オンラインショップURL
https://www.edo-tokyo-museum.shop/

江戸東京博物館 NEWS Vol.115

お問い合わせ 03-3626-9974（代表）
ホームページ https://www.edo-tokyo-museum.or.jp

来館のご案内 JR総武線「両国駅」西口から徒歩3分
都営地下鉄大江戸線「両国駅（江戸東京博物館前）」A3・A4出口から徒歩1分
都バス錦27・両28・門33系統 墨田区内循環バス南部ルート「都営両国駅前（江戸東京博物館前）」下車、徒歩3分

発行日　2021年12月17日（金）
編集・発行　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
制作・印刷　株式会社D_CODE

表紙解説

江戸東京博物館　西側外観

建築家・菊竹清訓（きくたけきよのり）の代表作ともいえる江戸東京博物館。設計期間は、1987年（昭和62）10月から1989年（平成元）3月。建築工事は、1989年6月から1992年（平成4）11月までの長期にわたる。その後、展示工事を経て1993年（平成5）3月に開館。構造は鉄骨造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造）。高さは62.16mで、江戸城の天守の高さに合わせたとされる。